

『さよならあかるい尾髀骨』

小高知子

登場人物

母妻女男

〈1〉

宵の口。

外で虫が鳴きはじめた。

肌にはりついた昼の空気が一枚一枚剥がれていく。

舞台にあかり。

ここは旅館の一室。

広縁には藤の椅子とテーブル。窓は開け放たれている。

室内には布団がふた組並んで敷いてある。

片方の布団だけがしどけない。

男、半裸で布団に寝そべっている。

女、電話をかけている。相手は女の母親。

男、電話する女を見ている。

女、電話を切り、

女 行かな。

男 え、

女 行かないと。

男 今から？

女 ううん、明日でいいって。

男 ああ、

女 うん。

男 あかんの、

女 え。

男 行かな。

女 うん、行かなあかなん。え、

男 え。

女 どうしよう。

男 どうしよって、

女 おにいちゃん、

男 お前兄貴なんかおった。

女 ちがう、近所の。

男 ああ。

女 昔たまに遊んでもらったりしてん。

男 亡くなったん。

女 うん、さつき。事故やって。

男 ああ、

女 あかんなあ、

男 え。

女 行かな。

男 明日でいいんやろ。

女 おばちゃんが、もう、ちよつと大変やねんて。お母さん、あ

つこのおばちゃんと仲よかったから。

男 お母さんも病院いてはんねや。

女 お昼過ぎからずつとやって。事故あつたんは今日の朝らしい。

男 ほんで病院運ばれて、

女 息引き取つたんはさつきやって。ちよつと前。

男 さつき。

女 うん。

男 ちよつと前。

女 うん、

男、にやにやしている。

女、その笑いの意味に気がついて、

女 やめや。
男 え、
女 なに考えてんの。
男 ええ、俺なんも言っへんやん。
女 その顔。
男 なんも言っへんやん。
女 言わんでも分かるやん、顔。
男 交錯する断末魔。
女 不謹慎。
男 空気を揺るがす絶頂の声。あの世の扉を叩く。おにいちゃんを誘（いざな）う。
女 ほんまにやめって。
男 （女を後ろから抱きすくめ）ええ声やな。
女 （男から逃れて）なに考えてんねん、ほんま。
男 ほんまに行くん。
女 分らん。
男 あと一泊せえへんの。
女 分らんって、だから。
男 お母さんにはなんて言ったん。
女 行けたら行く、また連絡する。
男 で。
女 で、
男 行けるわけ。
女 家にいるって言っちやっつた。
男 うそつきやな。
女 だっつて、
男 正直に言えばよかつたやん。
女 なんて。
男 だから正直に。
女 なんて言うねん。
男 正直に。

女 言えるかそんなもん。
男 うそつきやな。
女 お互いさまやろ。なんて言っへんのか知らんけど。
男、女、互いの顔をじっくりと見る。
それは紛れもない、共犯者の卑しい顔。
しばし間。
男 そいついくつ。
女 え、
男 まだ若かつたんやろ。
女 えーいくつやろ。あたしの、みつつ、あ、よつつ上か。あ。
男 え、
女 来月や、誕生日。
男 へえ。
女 誕生日むかえる前に逝っちやたわけか。
男 よかつたやん。こういうのって若ければ若いほど痛々しさが増すやろ。
女 あのさあ、
男 独身？
女 五月に二人目生まれたばっか。
男 あーあー。
女 どうすんねやろ。
男 なにが。
女 奥さん。
男 さあ。
女 どうしはるんやろ。
男 知らんて。
女 想像せえへんの。
男 なにを。
女 ある日突然旦那さんが死んだら。事故で。
男 べつに。

女 あたしは、する、めっちゃやる。まずさ、なんて言ったらいいんやろ、子どもに。
男 ああ、子どもなあ、
女 「お父さんな、車に轢かれてぐちゃぐちゃになったん。」
男 最低か。
女 「お父さんな、お星さまになってお空からあんたのこと見てるの。」
男 俺そういうのさぶいぼ出る。
女 お金のこと、住む場所のこと、再婚するべきや否や、
男 大変やな。
女 とか。
男 うん。
女 これだけじゃない、
男 だから大変やなつて。
女 考えるやろ。こういうの。
男 うーん。
女 心配じゃないの。
男 え、
女 自分が、事故で死んでしまったら。
男 ああ、
女 奥さんはどうするか。
男 どうにかするやろ。
女 えー、
男 なに。
女 冷た。
男 だって俺死んでるねんで。考えたところでもうどうにもできひんやん。
女 それはそうやけど、
男 すきにすればいいよ。
女 なにそれ。
男 すきについていうか、納得いくように。俺の人生じゃないし。
女 無責任やな。

男 だって俺死んでるんやろ。轢かれてぐちゃぐちゃのお星さまなんやろ。無責任でいいやん。
女 ぐちゃぐちゃのお星さまはどうやろ、
男 あいつの人生やもん、あいつが決めな。
女 え。
男 それに強いつて、
女 誰が、
男 女のひとは。女のひとつてか、
女 うん。
男 母親は。
女 ふうん。
男 うん。
男 ぐにやりとゆがむ共犯者の顔。
女 行かなあかんかな、
男 え。
女 あたし。
男 行きたいん。
女 行きたいように見える？
男 じゃあ行かんかったらいいねん。
女 無責任やねん、ほんま。
男 なんでなん。行きたかったら行く。行きたくなかったら行かん。行かなあかんかったら行く。行かんでよかったら行かん。
女 分かてるけど、
男 簡単やん。
女 簡単じゃないよ。
男 じゃあもう行けば。
女 え。
男 泣きに。
女 なにそれ。

男 行つて、さつきの想像？ 妄想？ の自分と、その近所の兄貴
の奥さんと重ね合わせて、ワンワン泣いたらすすきりするやろ。
女 (こたえない)
男 な。
女 アウト。
男 え、
女 アウトー。
男 なんて。
女 さすがにひどい。
男 そうかな。
女 取り消して。
男 どれを。
女 言つて。
男 なにを。
女 ごめんつて。
男 (女のくちびるにキスをする)
女 そんなんじゃないくて、
男 (ふたたび女のくちびるにキスをする)
女 するならちゃんとしろよ。せめて。
男 すきにしたらいいよ。
女 うん。
男 すきについていうか、納得いくように。
女 うん、
男 な。
女、男からすこし離れ、適当にからだに巻きつけていた
だけの浴衣を着なおしたり、乱れた布団を整えたりする。
男、たばこに火をつける。
女 女
男 女
女 今行ったら。病院。

男 そりゃあ、なあ。
女 巻き込まれたくないからな、正直。嫌な言い方やけど。
男 手伝つてあげんていいの、お母さん、病院いてはんねやろ。
女 お母さんはだつて、どうせおぼちゃんの面倒みてるだけやし。
男 なにそれ。
女 見張つてるんじゃない。あとを追つて手首切らんように。
男 まじで。
女 あつこのおぼちゃん昔からちよつとな、
男 うん、
女 あれやねん。
男 どれ。
女 病氣。
男 へえ。
女 気味。
男 なにそれ。
女 あたしもよく分からん。
男 なんやねん。
女、手もとの掛け布団を畳んだり、畳んだのをまた崩し
たり、枕を並べたり、並べたのをまたずらしたり、座卓
の上の湯呑みを並べたり、また仕舞つたり、している。
男、じつとしている。たばこの火はそろそろ消える。
女 あつ。
男 え、
女 あー。
男 なに。
女 うん。いや、ううん、ごめん。
男 なんやねん。
女 あたし今声出てたな。
男 出てたよ。
女 ごめん。びっくりした。

男 うん。
女 びっくりしたわ、うん。
男 うん、で、え？
女 えって、え？
男 いや、気になるから。
女 ああ。いや、あたしさあ、
男 うん、
女 今思い出して。
男 うん。
女 おにいちゃんのこと。
男 ああ。
女 中学あがるまでずっと女の子やってん、おにいちゃん。
男 なにそれ。
女 今思い出した。
男 どういうこと、女の子って。
女 自分のこと女の子やと思ってるん。
男 まじで。
女 まじで。
男 あれか、性同一性、
女 ううん、おにいちゃん男性。言ったやん、奥さんおんねんって。子どもも。
男 そっか。
女 見た目も趣味嗜好も、みーんな普通の男の子やのに、自分は女の子って信じて疑わへんかってん、なぜか。
男 なにそれ。そんなことある。
女 あーびっくりした。いろいろびっくりした。とくに忘れてた自分に。
男 なんで急に思い出したん。
女 さあ。
男 てか、そんなん忘れるもん。
女 だからびっくりしてんねんて。
男 だって今もつき合いあんねやろ。

女 うん。あ、でもだからかも、逆に。
男 逆に、
女 だって今のおにいちゃん、あのころの面影まったくないから。
男 ほんまに小学生のころまで限定なん。
女 うん、中学生なったら全然。
男 がつつり男、
女 普通の男子中学生。
男 へえ。なんかすごいな。
女 こうやって話すと。でも、おにいちゃん自身も忘れてるかもしらん、自分が女の子やったこと。
男 性転換ってめっちゃ重大事件やと思うけど。
女 だからそんな大げさなことじゃないねんて。なんていうん、現実と空想の区別が曖昧な子どもっておるやん。あれ、ああいうかんじ。あたしがセーラームーンやったんとおんなじ。
男 お前セーラームーンやったん。
女 昔な。
男 でもそれってなにがきっかけで変わるの。
女 セーラームーン？
男 ちがうわ。その兄貴、近所の。女から男になるきっかけ。
女 さあ。ひと言でいえば、成長、
男 なにそれ。
女 大きくなつたからちがう。
男 えっ。
女 え、
男 (自分の股間を見て) えっ。
女 いや、真面目に。
男 機能し出して気づいたってこと。
女 ちがうって。成長して、あつ自分女じゃないって分かった、みたいな。
男 なにそれ。
女 なんからおにいちゃんのそういう混乱って、内と外みたいなことやったと思うねん、結局。

男 へえ、
女 いや、ごめん。ちがうな。うまく言われへん。
男 安心できるかできひんかってこと、
女 自分サイドかそうでないか。
男 自分サイドが女、
女 そうそう。お母さんとか、あたしとか、ほら仲よかったから
さ。そういう、自分を攻撃しないひとつしてみんな女やってん、
男 おにちゃんの場合。
男 ふうん。
女 それで自分もそっち側っていうか、なじみのある方やと思っ
てたんやと思うねん。でも、成長して、そうじゃないって分か
った、みたいな。
男 でもそれ結構ショックじゃない。
女 え、
男 自分が、自分の思う、安全じゃない方の仲間やって気づいた
とき。
女 ああ、
男 しかもまだ子どもで。
女 うん。いやでもこれあたしの想像やからな。
男 うん、まあ。
女 こうやって話すとなんかすごいけど、
男 うん、
女 そんな壮絶なことではなかった。
男 そうか、
女 はず。
男 なんで急に自信なくなんねん。
女 だって忘れてたから。
男 ああ。
女 他にもいっぱい忘れてるかもしらん。
男 でも、
女 うん、
男 的をいってると思うよ、さっきの。

女 さっきの、
男 自分サイドのはなし。知らんけど。
女 知らんけど、な。
男 鋭いと思う。知らんけど。
女 えてる。
男 え、
女 えてる。的を。
男 ああ。
男、女、ふっと笑う。
しばし間。
男 まあ、でもなー、
女 え、
男 たしかに子どもなんて生まれて何年かは男も女も一緒ってか
んじするけどな。
女 なにそれ。
男 俺思うねんけど、子ども、てか赤ん坊っていうのは、あれべ
つのにきものやで。
女 そうなん。
男 赤ん坊っていういきものが進化して、ヒトになって、男と女
にわかれる、みたいな。見てるとそんな気がする。
女 へえ。
男 うん、進化。
女 しんか？
男 するのが遅かってんな、お前の、その兄貴は。
女 そうかなあ。
男 たぶんな。知らんけど。
女 まあ、そうかもな。それとあとお母さんの影響も大きかった
と思うけど。
男 へえ、
女 めっちゃ過保護やったしな。今思えばやけど。結構なにもか

も決められたり禁止されたり、そのだいいじだいいじのかんじが、
おにいちゃんを女の子っぽくしたんかもしらん。
男 頭イかれたおかん、か。
女 言い方。
男 どんなん、
女 なにが。
男 そいつのおかん。
女 どんなんって、
男 綺麗？
女 うん、わりと。若干お嬢様入ってる系。
男 メンヘラか、やっぱ。
女 だから言い方。
男 おかん病気って分かったんいつなん。
女 だいが最近やで。たしかあのころ、おにいちゃんもう奥さん
と婚約してたと思う。
男 はっ。
女 なに急に。
男 最近なんでも名前つけるからな。
女 名前？
男 病名。だから病気増えんねん。
女 ああ、
男 俺も。なあ、俺も病気かもしらん。
女 なんの。
男 分からんよ。まだ名前がないねんから。名前がないってこと
は定義がないってことやろ。だから今はまだそれがどんな病気
か分からんねん。
女 セックス依存症。
男 俺それテレビで見たことあんで。
女 高圧的、あ、ちがう待って、えーっと、女隷属欲肥大。
男 モラハラってこと？
女 バック挿入時スパンキングせずにはいられない症候群。
男 なんやねん、それ。

女 あとあれ、マザコン。
男 それ病気か、
女 コンプレックスやろ。びよーきびよーき。
男 てか今言ったやつ、全部あるって、もう。
女 え、あんの。
男 病気としてではないけど、広く知られてるやん。俺が言っ
るのは、名前をつけられることによって、今まで、ちよっと変
やけどこういうことって案外誰にでもあるよね、みたいなんが、
病気とか症状とか大げさなもんになるってこと。
女 スパンキングは完全に性的嗜好の域やろ。
男 だからこれ回数の問題になつてくんねんな。定義定義。
女 回数？
男 あなたがぶつ叩いたのは四十九回ですので、正常の範囲内
で、ヨカッタネ、とか言われるようになんねん、医者に。
女 なにそれ。
男 え、で、分かった。
女 なんのはなししてたっけ。
男 ほんまはな、前からあつてん。気づいてなかっただけで。
女 ああ、
男 いや、気づいてもおつてん。ただ名前がなかっただけ。
女 うん、
男、ふたたびたばこに火をつける。
女、それをじっと見ている。
女 もうにんげん？
男 え、
女 あんたんとこはもうヒトになった？
男 ああ。
男、たばこを灰皿に押しつける。

男 まだべつのいきもの。
女 へえ。
男 もしかしたら宇宙人かもしらん。
女 そうなん。
男 その可能性が捨てられへんくらいに未知。
女 ふうん。

男、座卓の上の湯呑みをとって口をつける。が、それは
先ほど女が並べただけの湯呑みで、中は空っぽ。
遠くで虫が鳴いている。

男 どうすんの。
女 え、
男 仲よかったみたいやん、兄貴と。
女 うん。
男 ほんまに顔見に行かんでいいの。
女 どうしよ。
男 電車なくなるで。
女 うん。
男 うん、えーでも、
女 なんやねん。
男 でも今日？ って思わへん。
女 なにが。
男 よりによって今日、今かってさあ、思わへん。
女 仕方ないやろ、こればかりは。
男 あたしは思う。
女 すきで死んでんのちがうからな。
男 今日、なあ。

女、男のからだに寄りかかり、肌に触れる。

女 もつかいする、
男 また。
女 もつかいしてから、行こうかな。
男 電車なくなるって。絶対終電早いからな、こんなとこ。
女 じゃあそれでもいい。
男 ほんならもう行くのやめや。
女 うん。えー、
男 どっち。
女 ふ。
男 どっちやねん。
女 帰んの。
男 え。
女 あたしが行ったらあんたも帰んの。
男 どうしようかな。
女 ほんで抱くの。この手で。
男 もう寝てるよ。
女 子ども、
男 何時やと思ってるねん。
女 奥さんは。
男 え、
女 奥さんももう寝てんの。
男 帰らへんって。泊まりやって出てきてんねんもん。
女 あー、えー、
男 なに。
女 こんなんで終わりー？
男 なにが。
女 嫌やこんなん、こんな尻切れで帰んの。
男 旅行な、
女 だけじゃなくて。
男 ああ。
女 だけじゃないやろ。
男 うん、

女 こんな、さいご。

男 でもあれ、その兄貴が死ぬのも一生に一回やで。

女 分かってるわ。

男 行きたいんじゃないの、ほんまは。

女 なあ、

男 うん。

女 やっぱりもつかいしよう。おにいちちゃんのこと考えながら。

男 お前最悪やな。

女 それで電車なくなったら、もう行かへん。明日も。

男 なんてそんなぐずぐずやねん。

女 だって、

男 てかさ、決めへんってことは、それは保留ではないからな。

女 えー、

男 決めへんかったとしても、流れてるやろ、時間は。
女 うん。

男、ゆっくり女の浴衣をはだけさせていく。

男 保留にして結論を先送りにしても、進んでるで、確実に。

男、女のくちびる、首すじ、胸に、口をつけながら、
女を布団に押し倒す。

男 確実に失っていったるから。

男、女の上に乗る。
男のからだと布団とで、女の姿はもう見えない。

男 もうひとつの選択肢を。

男、愛撫を続けている。執拗に。何度も何度も。

男 決めへんってなにもしてないようで、実はそれ選んでるねん。
選んでしまってるねん。なあ、

男、ゆっくり女のなかに入っていく。

あたりは暗くなり、男の影だけがかろうじて浮かぶ。

男の喘ぎ声が聞こえる。

喘ぎのように思われた男の声、しかし男は喘いでいない。

男は呼んでいる。何度も何度も呼びかけている。

男 なあ、なあ、なあ、なあ、なあ、なあ、なあ、なあ、

〈2〉

舞台にあかり。

ここは男と妻の家。

畳敷きの寝室。布団がひと組だけ敷いてある。

先ほど女を貫いたと思われる硬くなった男の先端には、

男の手があてがわれている。

妻、男の隣でたいぎそうに寝転んでいる。

妻 ひとりっ子ってな、

男 うん、

妻 だいたい当てられんねん。

男 うん。

妻 バレてんねん、だいたい。

男 うん、

妻 きょうだいいないんですよって言うやろ、

男 うん、

妻 そしたらな、

男 うん、
妻 ああって言われんの。ああ、って。ああ、ね、って。分かる、
男 (こたえない)
妻 あの、ああ。なんか含んだみたい。あれさ、聞いている？
男 うん。
妻 あれ、めちやくちや感じ悪い。言ってるひとら無意識なんや
ろうけど。あれ、馬鹿にされてるみたい。見下されてるみた
いな。聞いてないやろ。
男 うん。
妻 嫌やねん。だから。
男 うん、
妻 ひとりっ子。
男 あっ、
妻 ちよつと。終わらさんとしてや。
男 うん、
妻 もういい？
男、妻に覆いかぶさり、妻の中で果てる。
しばし間。
妻、男に背を向けて下着をつける。
男、布団の上からだを投げ出している。
妻、下着だけを身につけた恰好で、仰向けになって頭を
床につけ、腰から下を高く上にあげている。
妻 最近が多いって言うけど。
男 え。
妻 ひとりっ子。
男 ああ、
妻 でも、なあ、
男 うん。
妻 そういう問題じゃないねんな、
男 うーん、

妻 あんたには分からんか。
男 なにそれ。
妻 え、
男 なにしてんの。
妻 こうするといいいねんて。
男 なにに、
妻 ほんまかどうか知らんけど。
男 どこ情報やねん、それ。
妻 四ヶ月検診で仲良くなったお母さん。
男 へえ。
男、布団の上からたばこの箱に手を伸ばす。
妻、起き上がって男を見ている。
男、箱からたばこを一本抜き取り口にくわえるが、妻の
視線に気がつき、それをもとに戻す。
男 ごめん。
妻 なんで。
男 いや、
妻 なんも言ってへんやん。
男 見たから。
妻 見たけど。
男 見たけど。
妻 なんも言ってへんで。
男 いや、でも。
妻 ごめん。
男 えっ、
妻 ごめんな。今日。
男 ああ。
妻 びっくりした？
男 まあ、多少は。
妻 そっか。

男 うん、
妻 ごめん。
男 いいよ、そんな。
妻 びっくりした。
男 だからちよつとは、な。
妻 あたしも。
男 え、
妻 あたしもびっくりした。
男 それはそうやる。
妻 信じた？
男 え。
妻 信じた、あれ。
男 信じるって、
妻 うん、
男 信じるとか、
妻 うん。
男 信じひんとか、そういう次元じゃないやん、あんなん。
妻 じゃあどう思った、
男 え。
妻 あのおぼはんのこと。
男 べつに、
妻 いいよ、気遣わんで。
男 遣ってないよ。ていうか、遣う必要もないし。
妻 でもビビったやろ。
男 ビビ、うん、だってビビるよ、あれは。
妻 うん、
男 会社にやで、電話。どこで調べんねん。
妻 さあ。
男 なんていうの、ああいう尋常じゃない行動をとるひとの言うことをさあ、
妻 うん。
男 信じるとか信じひんとか。それ以前の問題やろ、だから。

妻 そうやな。
男 やろ。
妻 うん、
男 え、なに。
妻 いや、べつに。
男 なに。
妻 なんかな、
男 うん。
妻 なんかな、そういうところのひと達が来て、話聞かれたり、パ
ンフレット置いて行ったり、したわ。
男 そういうところって。
妻 児童相談所、
男 ああ、
妻 ああ、
男 っていうの、あれ。
妻 知らんけど。
男 うん。
妻 え、今日？
男 ううん。ちよつと前。もう一週間くらいかな。
妻 へえ。
妻 言わんかったつけ。
男 聞いてたつけ、俺。
妻 年間約百人。知ってた？
男 なにが。
妻 虐待で死ぬ子ども。
男 ああ、
妻 どう思う、
男 どうって。
妻 ただでさえ出生率低いの、うまれた子片っ端から死んでい
たらえらいことやんな。
男 そう、やなあ。
妻 実際はこの三倍やって。
男 え、

妻 ほんまはもつと多いねん。公の機関で分かっているだけで約百人。誰にも知られず、カウントもされず、死んでいく子が、もつともつといるってこと。

男 そうなんや。

妻 面白いわ。

男 そういう話を聞かされたわけ。

妻 だけじゃないけど。

男 他には、

妻 子育てのことでもちよつとでも悩んだら来てください、とかへえ。

男 相談室とか一時保育の利用の仕方、とか。

妻 ふうん。

男 (ふいに笑い出す)

妻 なに。

妻 (笑いながら) あのひとつら、ちよつと阿呆なんかもしらん。

男 なんて、

妻 おんなじこと言うねん。何回も。ずっと。おんなじことへえ。

男 呆けてんのかと思うくらい。延々。二時間近く。もう途中で相槌なくなってきたさあ、

男 適当にはーんとかほーんとか言つといたらよかってん。

妻 ふたり、三人か。並んで、リビング、座って。

男 うん。

妻 ひとつのこと馬鹿にするみたいなの、見下すみたいなの、そんな感じで、壊れたみたいになーつとおんなじこと。あれさ、客観的にみて、

男 うん、

妻 あたしの方がよっぽどまともやったと思う。

男 そりゃ、

妻 うん、

男 まともやろ。てか、まともやん。べつに。お前。

妻 みてる？

男 え。

妻 客観的に。想像して。リビングで、並んだ三人。オフィスカジュアル、風(ふう)。ひとりはずーと。バグったみたいに、ひと通り喋ったらまた最初から。くり返し。あたし、ひとり。そんな家来るなんて思ってたへんやん、だから普段着。顔、下地しか塗ってない。さっき言ったんとはちがう相槌、どんなあるかなって探してる。

男 うん。

妻 ちゃんとお茶も出した。前に誰かからもらったあのおいしくないやつにしたったけど。

男 うん、

妻 ちゃんとしてるやろ。

男 俺は、

妻 うん。

あとが続かず、しばし間。

男、妻、互いの顔をじつと見ている。

男、妻の頭や髪に触れようと腕を伸ばす。

妻、飛び退いて、

妻 続きは、

男 え。

妻 俺は、のあとはなんやねん。

男 ああ。

妻 やめるなよ。

男 え、

妻 途中で。くじけるなよ。

男 うん、

妻 見て。

男 え、

妻、腕を突き出して男に見せる。

妻 さぶいぼ。
男 イボ？
妻 とりはだ。
男 (妻の顔を見る)
妻 すごい？
男 急に寒いような気がする。
妻 男、妻、互いの顔をじっくりと見る。
妻 見えてる、これ。
妻、両腕をさするようにさわったり、電灯にかざして鳥肌をよく見ようとしている。
男 右？
妻 え。
男 そのおぼはん。どつちのひと。
妻 ああ。左やん、左隣。
男 ふうん。
妻 右隣はだつてあれ、息子さんがちよつと、あの、ほら。
男 ああ。
妻 え、なに。
男 え。
妻 そんなんもおぼえてないの。
男 いや、まあ、うん。
妻 えー。
男 うん、
妻 すぐ呆けるやん。
男 俺が、
妻 オフィスカジュアル風の仲間入りやん。
男 仲間ちがうわ。

妻 一緒に持つてつたのに。石鹸。お世話になりますつて。
男 めっちゃ前やん。
妻 めっちゃちがうわ。
男 でも一年以上は経つてるやろ。
妻 当たり前やろ。ほんでそういう問題じゃないし。
男 で、
妻 え。
男 で、どうすんの。
妻 なにが。
男 どうすんのつていうか、どうしよう。
妻 だからなにが。
男 苦情やろ、こういうのつて。一応。
妻 一応つていうか、
男 うん。
妻 立派な苦情やと思うけど。
男 だから。
妻 だから、
男 その、対策として。
妻 (ふつと黙る)
男 うん、
妻 (こたえない)
男 なあ、
妻 本気？
男 え。
妻 本気で言ってる？
男 うん。いや、うん。
妻 なに、対策つて。
男 いや、俺もどうしたらいいかは分からんけど。
妻 そうやんなあ。
男 だから考えようつて、
妻 うん。
男 気になるつて言われてんねやろ、その、

妻 泣き声がな。
男 うん、だから。
妻 歳とったからやねんて。
男 え。
妻 だから気になるねんて、よけい。あの甲高い声が。
男 ああ。
妻 普通逆じゃない、
男 逆って、
妻 歳とつたら高い音聞こえにくくなるんやろ。
男 さあ。ひとそれぞれなんちがう。
妻 気になって仕方ないねんて。
男 俺が行こうか。
妻 え。
男 その、左、あ、右か。
妻 左やって。
男 の、おぼはんのどこ。
妻 なにしに。
男 だから謝りに。
妻 対策、それが。
男 いや、それとはべつに。とりあえずなんか持って謝りに行つた方がいいやろ。それで解決するならそれに越したことないし。
妻 ふふ。
男 なに。
妻 そういのが通用する相手やったらな、
男 うん。
妻 こういうことにはなつてへん。
男 そう、やけど。
妻 ちょっと子どもが泣き止まんくらいで虐待やって通報したり、あなたの会社に電話かけて、奥さん子ども殺しますよつて、それこそ、あれ、
男 うん、
妻 もう呆けてんねんやん。

男 でも本人は正しいことしてると思つてんねやろ。
妻 そりやそうやろ。だから呆けてる言うてんねん。
男 だから、俺らの方でなんとかしなあかんやん。
妻 なんとか、
男 うん。
妻 なんとかするの？
男 そう。
妻 どうすればいい。
男 え、
妻 あたし、
男 うん。
妻 どうすればいいの。
男 だからそれを考えよつて。
妻 口にガーゼ入れる。
男 え。
妻 泣き声が漏れへんように。口をガーゼとかタオルでいっばいにする。
男 いや、
妻 抱きしめる。ぎゅうつて、めっちゃ強く。胸に顔を押し当てて、強く強く強く押し当てて、泣き声が漏れへんようにする。
男 おい。
妻 声帯を切る。泣き声だけじゃなくて、声そのものが出なくなるように。
男 おいつて、
妻 なにもできないようにする。泣いたり、笑ったり、動いたり、なにも。
男 ごめん。
妻 (笑う)
男 ごめん。
妻 (笑いながら) なんて謝んの。
男 そういふんて言つたんじゃない。
妻 そういふんて。

男 責めてるんじゃないねん。

妻 分かってるよ。

男 お前だけに、その、押しつけるつもりはない。

妻 分かってるって。

男 考えようと思っ、

妻 うん。

男 今回みたいな、こんなことになって、辛かったやろ、

妻 (こたえない)

男 その、お前が辛くないように、こういう事態にならんように、

妻 なんかつたりでできることを考えようって、思っ、

男 うん。

妻 なあ。

妻 辛い、

男 やろ。

妻 辛い。あたし、辛い。

男 うん、

妻 聞いてんねん、あたし、辛い？

男 え。

妻 辛いかな、あたし。

男 俺は、昼間は家おらんから。

妻 言われてん、オフィスカジュアル風の中の唯一のスーツ野郎

に、お母さんも辛いでしょうけど、お子さんも辛いんですよっ

て。

男、妻の肩を抱こうとする。

妻、それから逃れて、

妻 なんやねん、辛いつて。

男 考えすぎや。

妻 あたし、

男 考えすぎっていうか、思いつめすぎ。だって普通のことやん、

子どもが泣くって、それが仕事やん。それを辛いとかなんとか、

理屈つけてあだこうだ言ってるのは俺ら大人なわけさあ、
子どもからしたら、そんな泣くのが当たり前っていうか自然
なことなわけで、

妻 仕事？

男 え。

妻 泣くのが。

男 って言うやろ。

妻 そうなん。

男 それくらいに思っとく方が楽やっ、

妻 あたしはちがうと思っ。

男 え、

妻 あれは恨み節やで。恨んでんの、この世にうまれてきたこと
を。死ぬまで生きなあかんことを。

男、

男、たばこの箱をもてあそんでいる。

しばし間。

男 だから、

妻 うん、

男 帰るようにするよ、俺。

妻 うん。

男 毎日は無理かもしれんけど、早く帰って、なんていうの、時

間つくるように、

妻 そう。

男 する。

妻 そうして、

男 うん、

妻 もらえると助かる。

男 うん。

妻 ながいから、夜。だって、え、今何時。

男 今、

妻 ながいねん、夜。

男 うん、
妻 今まで生きてきた中で、最近の夜がいちばんない。
男 うん。
妻 しかも日に日になくなってきてる。
男 昔よりも？
妻 昔って、
男 遊び歩いてたころ。夜通し飲んでたころ。
妻 くらぶべくもなし。
男 そうか。
妻 なあ、
男 うん。
妻 夜ってこんなんやっただけ。
男 どういうこと。
妻 あのころはこんなんじゃなかった気がするねんけどなあ。
男 どのころやねん。
妻 夜じゅう遊んでたころ。
男 ああ、
妻 あのころ夜は味方やったのにな。夜の時間がほんまのあたし、
男 みたいいな。
妻 分かるよ。
男 でも今は、
妻 敵なん。
男 ううん、よそのひと。
妻 なにそれ。
男 よりたちが悪い。よそよそしい。まったく馴染まない。
妻 お前が？
男 うん。
妻 夜の方が？
男 うん。
妻 どっち。
男 どっちやと思う。
妻 さあ、

妻 分離してんねん、あたしと夜。分離したまんま、あたしの外
側で夜が流れる。世界の夜が。あたしは閉じこめられたまんま。
男 あたしの、この部分の夜だけが進まへん。
妻 うん、
男 だから考える。することないから。時間だけがあるから。想
像する。あんたなにしてんのかなあとか、
男 ごめん。
妻 なんて謝んの。
男 いやなんか、
妻 なに。
男 反射的に。
妻 なにそれ。
男 うん、なんか。
妻 あのおぼはんのこととか、
男 うん、
妻 隣でなにしてんねやるとか。
男 考えへん方がいいって、
妻 聞き耳たててんのかなって。
男 だから、
妻 あのひとひとり暮らしやねんな。
男 らしいな。
妻 結婚してたんかな。
男 さあ。
妻 子どもおんのかな。
男 知らん。
妻 泣き声に敏感に反応する、あれって母性なんかな。
男 かしらんな。
妻 だから気になって気になって仕方ないんかな。
男 女性の本能なんかしらんな。でも、だから、それはお前が
妻 気にすることじゃないと思う。
男 なあ、
妻 うん。

妻 あたしにもあんねん、母性。
男 そりや母親やねんから、正真正銘。
妻 可愛いとは思うねん、あの子のこと。
男 うん。
妻 可愛いし、愛おしい。
男 分かってるよ。
妻 愛おしい以外の感情が消滅するくらい、愛おしい。
男 どういうこと、
妻 すべてが愛おしいに侵食されて、どの感情も愛おしいに集約されんねん。
男 なんやねん、それ。
妻 そのくらい、濃いよ。
男 濃い？
妻 あたしの愛は。
しばし間。
男 深い、じゃなくて？
妻 え。
男 愛は濃いん？ 深いんじゃなくて。
妻 そう。あたしの愛は深くない。深くないけど、濃い。
男 そうか。
妻 あのおぼはんにもあんのかな。
男 濃い愛？
妻 うん。
男 あのひとつは他人やろ。
妻 あるんかな、まだ。あんなばあになっても。
男 ばああつて。
妻 だってあれ、生理なんかとつくにあがってるやろ。顔も首のへんも手も、全部皺くちややで、見た？ もう何年もセックスしてない、絶対。
男 おい。

妻 腰は曲がって、目は見えへんようになって、耳は遠くなつて、頭ももう半分呆けてて、それでもまだ母性みたいな、濃い愛みたいな、そんなんは残ってるんかな。
男 さあ。
妻 いつまで残んのかな、そういうの。最後まであんのかな。
男 なが。
妻 人間としての、ううん、いきものとしてのそういう機能がすべて衰えても、母性は衰えることなく、そこに、あんのかな。
しばし間。
男 分かってるから。
妻 え、
男 さつきも言ったけど。俺は。
妻 なんのはなし。
男 お前が、その、強い愛でもって、子どもと俺とを見てるって、母親やって、分かってるから。
妻 (笑う)
男 ほんまに。
妻 (笑いやまず)
男 なに。
妻 ううん、ごめん。ちがうねん、だってな、うん。
男 言うから。
妻 え。
男 本当じゃないことを。
妻 本当やん。俺が本当に思ってることやから、これ。ううん、そういうんじゃなくて、
男、妻のそばに寄りうとする。
妻、それに気づいて身をかまし、

妻 あたし、そういうはなししたかったんじゃない。

男 そういうって、

妻 早く帰ってきてとか、

男 うん、

妻 イクメンっていうの、

男 うん、

妻 あの言葉自体大嫌いやけど、それになれとか言ってるんじゃないよ。

男 分かってる、でも、

妻 家事に協力的になれとか、役割分担とか、そういうことじゃないやん。

男 でも実際必要やろ、協力も分担も。

妻 (ふっと黙る)

男 なあ、

妻、男の顔をじっと見ている。

男 するよ、協力。したいと思ってるよ、ほんまに。

妻 あんた、

男 うん。

妻 親子やな。

男 えっ。

妻 似てる。

男 なにが。

妻 似てるどころじゃないな。

男 え、

妻 どっち。今。

男 なにがやねん。

妻 あんた昨日の夜も泣いてたな、その顔で。

男 (黙る)

妻 一昨日の夜も、その前も、その前の前も、その前の前の前も、あつしなあ、

男 うん。

妻 分かんないよ、

男 なにが。

妻 毎晩あたしの腕の中で泣き叫ぶエイリアンは、あんたなん。

男、妻、互いの顔をじっくりと見つめる。

隣の部屋で赤ん坊が泣くのが聞こえる。

男 ああ、

妻、

泣き声が聞こえる。

それは原始的な、声というより、音。それは波となつて

あたりに満ちる。

高くて執拗な、聞く者を息苦しくさせる音。

妻、襖に向かって行こうとする。

妻、

男 いいよ、俺行く。

妻 いいよ。

男 いいって。

妻 いいねん。

男 今日くらい休みて。俺見とくから。

妻 いい。

男 なあ、

男、妻の手を引いて行くのをやめさせようとする。

妻、男の手を払いのけて、

妻 触らんといてっ。

男 なあ、

妻 触らんといてよ。

男 触らない。

妻 触らない。

妻 行くわ。
男 おい、
妻 行く。あたしが。
男 お前さあ、
妻 ごめん、
男 うん、
妻 ごめん、やねんけど、
男 うん。
妻 触らんというて。
男 だから、
妻 あの子に。
男 え。
妻 触らんというてほしいねん。
男 なにそれ。

妻 触った、今。
男 触ってない。
妻 触ったやん、今。
男 なあ。
妻 なに。
男 なにで。
妻 なにが。
男 俺触ってない。
妻 引っ張ったやん、腕。
男 俺触ってないやん、ずっと。お前に。触ってないやろ。
妻 (こたえない)

細く甲高い赤ん坊の泣き声、それはねこが鳴いているようにも聞こえる。あるいはもつとべつのなにか。まだ名前をもたない音のように。

妻、男、互いの顔をじつと見つめる。

女 おる？
男 おらんおらん。下やって、絶対。
女 でもすぐそこで聞こえた気する。
男 響くから、ああいうの。
女 赤ちゃんの泣き声みたいやった。なあ。
男 ああ。
女 え、あんなかんじやんな。
男 まあ、雰囲気は。
女 逆に子ども泣いてるとき、ねこみたいって思ったりする？
男 思うか。
女 そうなん。
男 それどころじゃないしな。

妻 ごめん。
男 いや、さすがに、
妻 あたしの子やから。
男 俺の子でもあるよ。
妻 ちがう。
男 なにがちがうねん。
妻 あたしから出てきたから。
男 え。
妻 あたしがこの世に捨り出した、あたしの子やから。

泣き声が聞こえる。
暗転。

〈3〉

舞台にあかり。
ここは旅館の一室。
男、女、窓から外をのぞいている。
女、浴衣から着替え、足もとにはかばん。帰り支度をし
たようだ。

女 そういうもんか。
男 でもあれなあ、何回聞いても、なんか、
女 うん、
男 慣れへんっていうか。
女 そうなん。
男 うん。
女 でも可愛いんやろ。
男 うん。
女 うん、
男 うーん。
女 どっち。
男 思ってたのとちがう。
女 思ってたよりは可愛くない、と。
男 ううん、俺が。俺が想像してた俺とちがう。
女 なにそれ。
男 慈しむ心？ ないねん。
女 父性不足。
男 そんな言葉あんの。
女 知らん。てきとー。
男 普通さあ、なんかこう、なにを差し置いても、みたいになる
女 と思うやん。
男 うん。
男 ならへんねん、俺。
女 ふうん。
男 その点やっぱ嫁はちがう。もう、まさに母親。
女 なにを差し置いても？
男 この身を呈してってかんじ。
女 さすが。
男 やばい？ 俺やばい？
女 べつに普通ちがう。女性是一回自分のお腹の中で育ててんね
男 んから。
男 やっぱりそういうもんなん。

女 そりやな。知らんけど。
男 ふうん。
女 あんたも腹ん中入れたらいいねん、十月十日（とつきとおか）。
男 サーパーかなって思うくらいビール入ってるけど、この中。
女 子宮ある？
男 ない。
女 残念。
男 俺一生持たれへんかったらどうしよう。
女 子宮？
男 慈しむ心。
女 そういうこともあるやろ。
男 欠陥？ 俺欠陥人間？
女 そういうひと意外と多い気するけど。言わんだけで。
男 そうかな。
女 てかさ、そもそも父性と母性には差があるよ、絶対。
男 差。
女 父性を一とすると、母性はその七十三億六千二百万倍くら
男 い。
男 そんなに、
女 だから父性なんてあつてないようなもんやし、気にせんでい
男 いんちがう。
男 お前、
女 なに。
男 世界中の父親に謝れよ。
女 なんですよ。
男 男性蔑視や。
女 仕方ないやん、事実やん。
男 そんなこと言われたら父親立つ瀬ないで。
女 あ、でも真面目なはなし、吸わせてみたらいいねんて。なん
男 かで読んだことある。
男 なにを、
女 おっぱい。

男 俺の？

女 俺の。

男 なにも出ないけれど。

女 出ないけれども。なんか、吸われて刺激されたらそういうホルモンが活発になって、どうのこうのって。

女、男の浴衣をはだけさせる。

女 でもやっぱキチャナイな。

男 おい。

女 やめとき。

男 あほか。

女、服をめくって胸を男に見せ、

女 ほら。

男 なに。

女 これあたしの。

男 知ってる。

女 なあ、

男 うん。

女 綺麗？

男 うん。

女 あたしの、綺麗やろ。

男 うん。

女 ちゃんと見てる？

男 見てる。綺麗。

女 ほしい？

男 うん、

女 吸わせてみる、

男 え、

女 吸わせてみたい？

男 誰に。

女 あたしは吸わせてみたい。

男 だから誰に。

女 (笑う)

男 え、

女 あんたしか吸うひとおれへんわ。

女、自分の胸をしまい、男の浴衣もおしてやる。

女 十月十日(とつきとおか)。

男 うん。

女 約一年？

男 よりは、ちよつと短いけどな。

女 ふうん。

男 体感ではもつと短い。

女 そんなもんで、

男 うん。

女 あのおたまじゃくしはヒトになんねんな。

男 そう考えるとちよつと感動やろ。

女 あれ、ほんまにおたまじゃくしのかたちしてんの。

男 さあ。見たことないもん。

女 見たことあるやろ。

男 でも見えたことはない。あれちっさいんやで。

女 知ってるわ。目に見えへんくらいちっさい命が、わずか一年

足らずで三千グラム。

男 うん、

女 (手で大きさをあらわしながら)これくらい、こんなもんか。

男 ちよつと大きい、

女 (手で大きさをあらわしながら)そっからさらに一年でこれ

くらい、

男 かなあ。

女 五年でこんなもん。

男 はよ行き。
女 うん、

女、襖の方へ行き、

男 じゃあ元気で。
女 あっさり。

男 俺はもうじゅうぶん惜しんだから。
女 うん。じゃあ元気で。

男 うん。
女 うん。

女、襖の方を向き、襖に手をかけるが、急にふり返って
座卓の前へとつて返す。

男 なに。
女 うん、
男 びっくりするやん。
女 あぶない。
男 え、
女 忘れるところやった。
男 なにが。
女 あぶない。
男 なんやねん。
女 お茶飲もう。
男 飲んで。
女 飲まなあかんから。(座卓の上を見回して) スプーンどこ。
男 いや、え、
女 びっくりした、行ってしまふところやった。
男 行くんやろ、だつて。
女 うん。

女、スプーンで湯呑みの中をかき回している。

男 うんつて。なんで今さら。
女 うん。
男 だからうんじゃなくて。ほんでそれ緑茶やで。
女 見て。

女、湯呑みに浸していたスプーンを男の目の前に持つて
いき、

女 綺麗、
男 聞いてる？
女 うん、
男 なんて。
女 いや、あんま綺麗じゃないか。
男 今さら。
女 綺麗なってる、これ。
男 辛くなるだけやで。
女 え、どっち。分からんな、これ。
男 お互い。
女 濡れてるから光って見えるだけか。
男 ぐずぐずしたやん、散々。
女 でもやっぱちよつとくもり取れてると思う。
男 何年も。
女 うん、
男 俺ら。なあ、
女 どう思う。ヒ素は黒くなるねんで。
男 え。
女 スプーンとか入れたら。
男 なにそれ。
女 ほんまかどうか知らんけど。
男 あのさ、聞いている、

女 でもあたし、ちゃんともり取れてると思うねん、このへん。
男 なあって。
女 ヒ素は黒くなります。青酸カリはくもりが取れます。
男 え。
女 って書いてあった。ネットやからあんま信用できんけど。
男 なにそれ。
女 取れてると思う、このへん。
男 入ってんの。
女 うん。
男 うんって。
女 うん、
男 なんて。
女 入れたから。
男 うそやろ。
女 ほんま。
男 うそ。
女 ほんまやって。
男 いやだって、え。どうやって、
女 だから普通に、さーって。気づいてた？
男 え。
女 知ってたん、入れたの。
男 いや、
女 だから口つけへんかったん。
男 うそやろ。
女 さいごなんやろ。
男 え。
女 言ったやん、さいごって。
男 うん。
女 だから、
男 だから、なに。
女 飲もうと思っただけ。一緒に。

女 はい。
男、それを受け取れない。
窓の外でねこの鳴き声がする。
高くて執拗な、声というより、音。それは波となつてあ
たりに満ちる。
女、ふたつの湯呑みを手に男に歩み寄り、そのうちのひ
とつを男に差し出す。
男、あたりは暗くなり、しかし窓の外だけが煌々とあかるい。
男、吸い寄せられるように窓の方を見ている。
闇にまぎれて女の姿はもう見えない。
男 なあ、

〈4〉

舞台にあかり。

ここは母の家。

畳敷きの寢室。布団がひと組だけ敷いてある。

母 はい。

男 え、

先ほど女が立っていたその場所で、
母、男に湯呑みを差し出している。

母 もう冷めたから。ちようどいいくらい。飲めると思うわ。
男 (こたえない)

母 どうぞ。

男 うん。

母 どうしたん。

男 え、

母 なにか面白いもの見えた、

男 え、

母 今日はなにが通ったの。

男 なにがって。

母 お外。

男 ああ、

母 たまにはおもてで遊んだら。

男 え、

母 見てるばかりで楽しいの。

男 いや、

母 うん。

男 どうやる。

母 休み時間も、

男 え。

母 誰かと遊んでないと楽しくないって、なんで思うんやろうな。

男 なんのはなし、

母 先生。

男 ああ、

母 言つといたからな。ちやんと。

男 なにを、

母 あんたのこと、ちやんと言つといたから。

男 なんて言つたん。

母 な。

男 おかあさん、

母 はい。

男 うん。

母 なに。

男 いや、

母 なに、急に。

男 ううん。

母 あんた、

男 うん、

母 座つて飲みなさいや。

男 ああ、

母 せわしない。

男、あたりに腰をおろす。

母、座卓の上の湯呑みをさわったりしている。
問。

男 どう。

母 え、

男 どうなん。調子は。

母 調子、

男 うん。

母 どうって。なんで。

男 夜あんま寝れてないみたいって聞いたから。
母 誰に。
男 だから、いつも来てくれる、あの、名前なんやっただけ。
母 ああ。
男 大丈夫なん。元気？
母 まあね、
男 うん。
母 まあまあね。
男 そっか。
母 なに、
男 いや。
母 へんな子。
男 荷物な、
母 え。
男 荷物。とりあえずは出来たって聞いたけど。
母 うん、
男 出来た、
母 そうやね。
男 あとで足りひんもんなら持って行くから、俺。言っつてな。
母 そう。
男 まあ、ほんでべつにまた帰ってこられるから。いつでも。そんなときに持ってたらいいし。
母 そうやね。
男 むかえにくるから。
母 誰が、
男 俺が。明日。ちよつと朝早いけど。手続き、ついでいってもほとんど終わってるけど、九時からやねん。あのー、また名前忘れた、あの施設長、ついでいうの、あのひとも同席してくれるって。
母 そう。
男 一応聞いとくやろ、一緒に。
母 なにを、

男 手続きとか、その、なんていうの、説明、
母 ああ。
男 あのさあ、
母 うん、
男 おかあさん、
母 なに。
男 ううん、
母 なんやの。
男 いや、ごめん。
母 なんなんよ。さつきから。
男 ごめん、
母 聞くよ。
男 え、
母 はなし。一緒に。明日。
男 そうか。
母 その方がいいんですよ。
男 え。
母 あんた。
男 そう、やな。うん、頼むわ。
男 なんとなく、間。
男 じゃあ、
母 え、
男 俺行くわ。
母 そう。
男 あんま遅なつてもあれやから。
母 そうやね。
男 ほんまに、手伝わんで大丈夫やねんな、
母 え。
男 荷物。
母 うん。

男 そうか。
母 ありがとう。
男 うん、

男、しかし立ち上がれず、湯飲みを持ったままじつと黙
っている。
間。

母 あんた、子どもいてる。
男 え。
母 独身、まだ。
男 いや、え、なんで。
母 あたしねえ、
男 うん、
母 息子がおんの。ひとり。
男 うん。
母 ひとりっ子。甘ったれやねん。ひとりっ子、みんなそうやね。
男 うん、
母 なあ。ほんま、いつまでたっても。
男 しっかりしたひとりっ子もいると思うけど。
母 でもうちの子はあかんわ。よう遊ばんねん、他の子と。
男 そうなん。
母 学校でもな、休み時間遊ばれへんねやって。
男 へえ。
母 おたくのお子さん、休み時間なったらピオトープのところで
いつつもひとり言言うたはりますって、
男 なにそれ。
母 言われたん。先生に。でもいいやんなあ、ひとり言くらいす
きに言わせてってかんじやんなあ。
男 そうやな。
母 あの子な、
男 うん。

母 おはなしつくるの上手なん。
男 へえ。
母 いっぱいつくってな、話してくれるの。
男 いいやん。
母 それ考えてんのやと思うわ、休み時間。
男 そうなんかな。
母 夜、寝る前、普通は母親が子どもにむかしばなしとか、絵本
とか読んであげるでしょう。
男 うん。
母 うちは逆なん。あたしが抱っこして、あの子が話すの。
男 へえ。
母 昨日、一昨日か。またおはなししてくれて、新しいの、な。
男 え、
母 親馬鹿かしらんけど、ほんまにな、上手なんよ。
男 誰が、
母 え。
男 誰がおはなしすんの。
母 あの子。毎晩、夜になったらきてな、抱っこしてーって。
男 (こたえない)
母 こう、膝の上のせて、うしろからこうな、
男 (こたえない)
母 今日は遅いな。
男 (こたえない)
母 いつもやったら今時分もう来てんねやけど。な。
男 そう、なん。
母 今日は遅いわ。
男 心配やな。
母 え。
男 いや、だから、その遅いからさ、来んのが。
母 (ふっと笑う)
男 うん、
母 あんた、子どもいてる。

男 え、
母 独身か。まだ。
男 いや、
母 子どもってな、吸いつくねん。知ってる。
男 知らん。
母 肌。びたつて。もう結構大きいねんけどな、あの子、でもあたしの肌、肌っていうか腕のかたち、腕じゃないか、なんか、言われへん。こう、きつちりな、おさまんの。よう出来たあんな。
男 誰を。
母 え。
男 誰を、抱っこするの。
母 あんた、子どもいてる。
男 (こたえない)
母 あたしねえ、息子がおんの。ひとり。
男 (こたえない)
母 ひとりっ子。甘ったれやねん。ひとりっ子、みんなそうやね。
男 ひとりっ子でも、
母 うん。
男 大人になつたらしつかりするんじゃない。
母 そうやね。
男 うん。
母 でもあの子、まだな、
男 うん。
母 耳のこの、付け根らへんがな、乳くさいの。いつまでたつても。もう小学校あがつてんのよ。
男 そうなん。
母 休み時間、よう遊ばんねやつて。ビオトープでな、ひとり言言ってるらしい。夜な、いつまでたつてもひとり寝られへん。甘ったれやねん。ひとりっ子、みんなそうやね。
男 おかあさん、
母 なに。

男 もう寝る、
母 え、
男 もう、寝たら。
男、母、互いの顔をじっくりと見る。
母 ああ、
男 朝早いから、明日。九時からやねん、手続き。
母 うん、
男 入所。施設長も一緒にはなししてくるつて。
母 そうなん。
男 大変やから、明日。車も乗らなあかんし、な。寝よう、もう。
母 俺行くから。
母 うん。
男 寝られる、
母 え、
男 ひとりで。
母 (ふつと笑う)
男 なに、
母 あんた、
男 うん。
母 子どもじゃあるまいし。
男 (すこし笑つて) じゃあ、俺行くわ。
母 はい。気をつけて。
男 布団、
母 え。
男 布団入るときや。寝られへんでも。
母 はいはい。
母、布団の方へ行く。
母 口やかましいこと。なあ。

男 え。
母 あんた。最近。
男 そうかな。
母 所帯じみんのかな、男も。
男 え、
母 家庭をもつと。
男 どうやら。
母 しょうもないな。
男 うん、
母 しょうもないわ。
男 そうか。
母 あんなちっちゃかったのに。
男 もういい大人やで。
母 ビオトープでひとり言言ってたのに。
男 それさあ、
母 え。
男 俺全然おぼえてへんねんけど。
母 あ、そう。
男 それ、いくつくらいとき。俺学校でそんなんで先生に注意
されたことあったかなあ、
母 し、
男 えっ。
母 し。
母、布団の上から窓の方を見ている。
しばし間。

母 気のせいか。
男 閉まつてる。
母 え、
男 窓。閉まつてるで。
母 ああ、
男 閉めて帰るから、玄関も。ちゃんと。
母 うん、
男 ちゃんと寝て、な。早いから、明日。
母 そうやね。
男 おかあさん、
母 なに。
男 (ちよつと考えて) 行くわ。
母 うん、
男、襖の方へ行き、しかしさっきの続きを言おうか考え
ながらそこに立っている。
母 失われた、
母、腕になにかを抱いている。
男 え。
母 失われたからだの機能について、
男 なに、
母 君は考えたことがあるか。
母、くつくつと笑う。
男 どうしたん、
母 だって、君、やって。小学生が。君、やで。
男 ああ、
母 あーおかし。ボキヤブラリーにな、

男 うん、
母 偏りがあるわな、ひとりっ子やから。
男 それ関係あるかな。
母 僕らがなくしてしまった器官について、
男 うん、
母 君は考えたことがあるか。ヒトはその進化の過程で、なくしていったからだの機能が実に百個以上もあるという。たとえば虫唾。たとえば瞬膜。横口蓋ひだ（おうこうがいひだ）。大きな耳。副乳。立毛筋（りつもうきん）。失うことが進化だとすれば、僕たちはこれからもどんどん失うだろう。失うことが進化だとすれば、つかすぼんと消えてしまう。失ってゆく、というのはどういう感覚なんだろう。失いつつあるそのさなな、ひとはなにを思うのだろう。忘れることと失うこととは一体どのくらいちがうだろう。僕たちが、いま、患って、苦しんで、もて余している器官のうち、いくつかは数千年後にはすでに失われているかもしれない。その儚さと生命のしたたかさについて、君は考えたことがあるか。僕は毎晩僕の尾骶骨に問いかける。脊椎のいちばん下、ちいさな骨が寄り添うように集まった、その名残の部分に問いかける。

母、立ち上がって窓の方へ行き、

母 まだあるかーっ。あんたまだ、そこで、そうしてるんかーっ。
問。

母 近所迷惑やな。
男 そうやな。
母 怒られたらどうしよ。
男 何時やと思ってるんですか、って。
母 でも明日からはもうここおらへんし、いいやろ。
男 （絶句）

母 あー、のどかわいた。な。
男 叫んだからな。
母 お茶いれてくるわ。
男 ある。
母 え。
男 あるよ、ここ。いれてたやん、さつき。
母 なにそのお茶、
男 え、これ、
母 それあれやろ、あのひとがくれたお茶やろ。
男 ああ、いつも来てくれる、あの、名前なんやっただけ。
母 眠なるねん。
男 え。
母 それ飲むと。
男 どういうこと、
母 あんた車。
男 ああ、うん。
母 ほんなら飲んだらあかんよ。
男 え、
母 帰り、事故起こしたら大変やろ。
男 うん。
母 あんたなあ、
男 うん、
母 言うといたるけど、妻と子ども残してひとり逝くなんて最低よ。

男 そうやな。
母 普通のお茶飲みたいわ。
男 いれてこようか、
母 あんたが、
男 でも分かるかな、どこにあるか。
母 （笑う）
男 なに。
母 あんた、まめやな。

男 お茶くらい、べつに。
母 あんた、子どもいてる。
男 え、
母 あたしねえ、息子がおんの。ひとり。
男 そう、
母 ひとりっ子。甘ったれやねん。ひとりっ子、みんなそうやね。
男 甘ったれでも、
母 うん。
男 家の外ではちがうんじゃない。
母 そうなん、
男 え。
母 ちがうの。家の外では。
男 いや、知らんけど。
母 そう。
男 でも、
母 うん。
男 家の外には世界があるやろ。
母 世界。
男 世の中。
母 ああ、
男 存在しなあかんやん、そこで。
母 うん。
男 子どもでも。
母 そうやね。
男 だから、
母 うん。
男 甘ったれ、なんかな。
母 誰が、
男 どうなんやろ。な。
母 誰が甘ったれやって。
男 (こたえない)
母 誰にそんな言われたん。

男 (こたえない)
母 泣きなさんな、そんなんで。
男 全然泣いてないけど。
母 言っただげるから、ちゃんと。
男 え。
母 あんたのこと。ちゃんと。
男 おかあさん、
母 なに。
男 友達できるといいなあ。
母 うん、
男 夜、ちゃんと寝られるようになるかな。
母 どうやろ。
男 言っただげるから、ちゃんと。
母 え。
男 明日。ちゃんと。
男 間。
母 のどの奥がひりひりと熱い。
男 のど、
母 うん。
男 かわいた。
母 俺も、
男 うん、
母 のどかわいた。
男 そう。
母 いれてくるわ。待ってて。
男 お茶、
母 うん。
男 飲まして。
母 うん、いれてくる。
男 飲まして、早く。

男 うん、ちよっと待って。
母 なあ、
男 なに。
母 のど、
男 うん、
母 からからや。
男 そうやな、
母 燃えるみたい。
男 うん、
母 血出そう。なあ、
男 なに。
母 いてる、
男 え。
母 あんた。
男 うん、
母 まだ、そこに。
男 (こたえない)
母 まだ、そこで、そうしてる。

男、湯飲みの中のお茶を口に含み、母の方に歩み寄る。
母、男をじっと見ている。
男、母の首あたりに手を添え、そっと顔を近づける。

暗転。

(5)

舞台にあかり。
ここは旅館の一室。
男、女、くちびるを重ねている。
座卓には湯呑みがふたつ並んでいる。
女、くちびるを離して、

女 ふふ。
男 なに。
女 ううん。
男 なんやねん。
女 照れてしまった。
男 なんで。
女 分かん。
男 今さら。
女 なあ、
男 なに。
女 恨んでる？
男 なにを。
女 全部。
男 全部、
女 この世にうまれてきたことを。
男 なんやねん急に。
女 死ぬまで生きなあかんことを。
男 べつに。
女 ふうん。
男 なあ、
女 なに。
男 こういうつもりやった？
女 え。
男 はじめから。
女 こういうって、
男 別れるつもりはなかった。
女 さあ。
男 さあつて、
女 べつに決めてたわけじゃないもん。
男 ふうん。
女 決めたことなんてない。
男 なにそれ。

女 気がする。この十五年において。
男 ふうん。
女 後悔してる、
男 してんの、
女 聞いてるねん、後悔してる？
男 さあ。お前は、
女 あたし、
男 うん。
女 うーん、
男 うん。
女 後悔ってどういうことやろうな。
男 知らん。
女 興味本位でセックスせえへんかったらよかった、とか、
男 まあ、
女 さっさと恋人同士になっとけばよかった、とか。
男 そうやなあ。
女 あんたと結婚しとけばよかった、とか。
男 うん。
女 他には、
男 あったのにな。
女 え。
男 選択肢。いっぱい。今考えると。たぶんもつとあるはず。あ
女 つたはず。
男 そうやなあ。
女 でもな、
男 うん。
女 うん。
男 でも、
女 なに。
男 もし仮にやり直せたとして、もっかいできたとしても、俺は
女 ここにいる気がする。
男 うん、
女 うん、
男 なんてやろ。

女 さあ。
男 なんてやと思う。
女 知らん。
男 俺な、
女 うん。
男 知ってる。
女 へえ。
男 うん。
女 なんてなん。
男 なくしてん。
女 うん、
男 進むために。
女 なにを。
男 なくして、それで忘れた。
女 なにをなくしたの。
男 失うことと忘れることってべつやろ。
女 うん、
男 なくして、なくしたことを忘れて、忘れたこともなくして。
女 じゃあもうなにもないやん。
男 そうやで。
女 でも不思議、
男 なにが、
女 なにもないのに、ある。なにもない場所が、なにもない痕跡
が、ある。
女 あ。
女 窓の外で赤ん坊の泣き声がする。
泣き声、あるいはもつとべつのか、まだ名前をもた
ない音が聞こえる。
女、窓の方を見る。

泣き声は男には聞こえない。深夜、世界が寝静まるとき、その声を聞き分けるのはいつも女。

女 来た。
男 え、
女 なあ、
男 なに。
女 聞いて。
男 なにを。
女 さっきの。後悔してる？ って。
男 後悔してるの。
女 してない。
男 そうか。
女 でも、
男 うん。
女 あたしらもつと遅くに出会えばよかったな。
男 なにそれ。
女 もつとあと、人生の後半らへんで。そしたらこんな、こんな
男 思いせんで済んだのに。
男 こんなって。
女 わけの分からへん、からだの片つぽがもがれるような、鈍い、
男 痛い、息のできひん、こんな思い。
男 うん。
女 せんで済んだのに。
男 そうかな。
女 ちよつと早すぎたな。
男 そうかな。
女 早すぎた。
男 一緒やろ、でも。
女 え。
男 いつ出会っても。今でも。十五年前でも。
女 そうかな。

女、吸い寄せられるように窓の外を見ている。

男 百年後でも。千年前でも。
女 なあ、
男 うん。
女 来た。
男 うん。
女 来たな。
男 出会ったことは問題じゃない。それがいつでも、なにを選んでも、俺らは、俺はここにいる。いたと思う。

女、窓のそばへ行き、男を見る。

女 来た。
男 うん。
女 見てる、
男 うん。
女 この世のすべてを放棄して、それでもあたしらは一緒に
男 たん。

女、窓をあける。

窓の外は真つ赤に染まっている。黒く冴える真つ赤。

男、女、並んで窓の外を見ている。

脊椎のいちばん下、ちいさな骨が寄り添うように集まった、名残の部分に問いかける。

そして、

さよならあかるい尾骶骨。

終